

道元禅と社会貢献—“叢林生活”の歴史と展望—

駒澤大学 池上光洋

中国の天童如浄のもとで参学の大事を了畢した道元は、「弘法救生をおもひ」として帰朝した。のちに書かれた『正法眼蔵』「菩提薩埵四摂法」には、「舟をおき、橋をわたすも、布施の檀度なり。……治生産業もとより布施にあらざることなし」という記述が見え、長円寺本『正法眼蔵随聞記』にも、困窮者に対処する栄西の故事が仏者の亀鑑として語られている（巻3・第2話、巻1・第12話）。これらの点から道元は、思想的には社会貢献活動を肯定的にとらえていたことがうかがえる。

道元と同時代に活躍した叡尊と忍性は、文珠信仰にもとづく非人・癩者への救済活動や、道路修築や架橋事業などを行った。一方、道元には、その生涯で積極的に社会活動を行ったという伝承は存在しない。この道元の思想と実践の齟齬は、どのように考えたらよいのだろうか。

道元は、厳格な規矩をもと運営される出家者中心の叢林をその活動の拠点とした。叡尊・忍性の僧団が広く社会に開かれたものであったことと比較すると、いわば“閉じられた”空間であったといえよう。その中では各自の役割にもとづいた修行とともに、次世代の正法伝持者を育成するための一箇半箇の接得が行われていた。社会の危機的状況に対して積極的に人々と関わっていく「わかりやすい社会貢献」に対し、道元は出世間の法に重きをおき、危機的状況であるからこそ寺院に籠るという「わかりにくい社会貢献」を実践したといえよう。現代人の目から見て批判を受けても致し方ない面が存在する。

しかし、道元から直に指導を受け、のちに法系上は孫弟子となる寒巖義尹は、道元同様の叢林生活を営みながらも、架橋や干拓等の社会事業も行っている。また、永平門下が全国展開をする過程で葬祭に密接に関わっていった事実は、衆苦に寄り添い、低減させていく社会貢献活動としての一面があったことも見逃せまい。さらに目を現代に転ずるならば、阪神淡路大震災を契機として活性化した災害ボランティアや、毎年数万人の死者を出す自殺の予防や遺族のケア、両者とも密接にかかわる傾聴ボランティア等々、道元の時代には考えられなかった展開が現代の曹洞宗にはみられる。

これらは世間から評価される活動であるが、一方で問題がないわけではない。広く社会にコミットすることによって、逆に実践者の個性が拡散してしまうという点である。現代的な課題として、あらためて永平門下としてのアイデンティティーが問われているといえよう。

曹洞僧としての個性を維持しながら、世間的な意味での社会貢献とどう折り合いをつけていくのか。道元禅の重要な構成要素である「只管打坐」を中心に、今後の展望について考察していきたい。

キーワード：道元、叢林生活、坐禅、社会貢献、健康